
オシツオサレツ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オシリオサレツ

【Zコード】

Z8409F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ドリトル先生に出て来る動物オシリオサレツ。少年達はいるかいなか論争になっていたが西アフリカに行つてみると何と。ドリトル先生のあの動物を話にしてみました。実際世の中何がいるかわかつたものではありません。

オシツオサレツ

「いないつて」

「いるよ」

牧野定文と稻垣昌信は学校の帰り道にこう言ひ合つていた。見ればいると言つている昌信の手には一冊の本がある。どうやらそれは小説らしい。

「間違ひなく『いるよ』

「それは小説だよ?」

定文は眉間に皺を寄せて言つて來た。

「小説のキャラクターじゃないか」

「けれど何処そこに『いる』って別の本で書いていたし「そのシリーズに?」

「ううん、別の作家の別の本」

首を横に振つてから定文に答える。とにかく学校の帰り道でお互い必死な顔で言い合つ二人だった。

「それに書いていたんだよ。アフリカのさ、中央アフリカにいるつて

「まさか。いる筈がないつて」

定文はとにかく昌信の言つことを否定する。そう言つて自分より少しだけ背の低い色白で太目の少年を見るのだった。目がグレムリンという映画のギズモそっくりでとにかく奇麗だ。

「そんなさ。前後に頭が一つずつついてる山羊なんて

「じゃあドリトル先生のこの話は嘘だつていつの?」

「だからそれは小説じゃないか」

定文は昌信が今持つていてるその小説を指差した。見ればそれはドリトル先生の本だった。言つまでもなく世界的なベストセラーのシリーズである。そのうちの一冊なのだ。

「小説。本当じゃないよ
「いないつていうんだね」

「賭けてもいいよ」

定文はここまで言い切る。

「絶対にね」

「じゃあいたら？」

「まさか」

頭からその可能性を否定するのだった。
「そんなことはないって。有り得ないよ」

「中央アフリカにはいるんだけれど」

「じゃあ確かめたいね」

定文はいる筈がないと確信していつ言い切つてきた。
「その中央アフリカに行つてね」

「言つたね」

「うん、言つたよ」

胸を張つて昌信に答えた。

「是非共ね」

「じゃあ行こうよ」

昌信はそれに応えるようにしてまた言つのだった。

「中央アフリカにね」

「行けたらね」

「今にでも行けるよ」

しかし彼はまた言つてきた。

「何時でもね」

「！？アフリカだよ」

定文は昌信が何を言つているのか全く理解できなかつた。冗談と
さえ思えなかつた。そうだと考える程の余裕すらないというのが実
情だつた。

「アフリカなんだけれど」

「だから行けるんだつて」

「どうしてなんだい？」

「ほら、これ」

「ここで彼はあるものを定文に対して見せてきた。

「これがあるからね」

「それ・・・・・・何？」

「バスポート。ほら、うちの中学校つて修学旅行台湾じゃない」

「うん」

修学旅行先としては珍しいと言える場所だった。

「そういえばそうだつたね」

「だからもうバスポートはあるし」

「けれどそれだけでアフリカは行けないよ」

まだ言う定文だった。最早話のペースは完全に昌信のものだった。
彼はそれについているだけといった状況になっていた。

「アフリカに行くには」

「だから。それも大丈夫なんだって」

「どうしてなんだよ」

「ほら、高等部の美作先生」

「美作先生！？」

「今度アフリカ行くんだよ」

「このことを定文に話してきた。

「アフリカにね」

「つていうと中央アフリカに？」

「そうだよ。夏休みにね」

「夏休みにかい」

「お金はいらないらしいし」

残る最大の問題は定文が言う前に解決してしまった。

「だからさ。行こうよ」

「美作先生、何でまた中央アフリカなんかに」

定文はそれが不思議でなかつた。首を捻りながら述べるのだった。
同時に腕を組んでもいる。深く考える仕草である。

「行くんだろう」「う

「あの先生の専門ってアフリカの地理学らしいし」

「アフリカの！？」

「そこで宝石を集めたりもしているんだってさ」「このことも定文にとつて意外なことだつた。

「その宝石を奥さんにあげて結婚指輪にしたらしいし」「何気以上に凄い話なんだけれど」

「とにかくさ。行くよね」

もう半分以上話が決まつてしまつていた。なおまだ定文は一言も答えてはいない。その前に昌信が一人で決まつてしまつていた。

「中央アフリカに。夏休みに」

「アフリカかあ

あらためてそのことについて考える定文だった。

「何かなあ

「アフリカが嫌なの？」

「つていうかオシツオサレツだよね

「うん

行く目的は変わらない。やはりそれである。

「そんなの。本当にいるわけがないの」「だからいるんだって」
昌信はまたムキになりだした。どうせこのままではやがてだわり
があるようである。
「絶対にね」
「まあひ。それで昌信の気が済むんなら」「いいよね」「いいよね」
「海外旅行だと考えればいいか」「そういうこと。ただしね」「あと何があるの?」
既に色々言われているのでまだ何かあるのかと思い返した言葉だ。
返してみると実際にあるといふのは定文にとつては悪い意味で予想通りだつた。
「まだ。あるの?」「向こうに行つたら猛獸に注意してね」
いきなりこれだつた。
「ライオンとか犀とかさ」「それはわかつてゐよ」
これについては覚悟していた。だから驚くことなく言葉を返した。
「もうね」「もうね」
「何だ。わかつてゐんだ」「アフリカつていつたらそれじゃない」
アフリカといえばライオン、もつそつインパチトされていのつた。オーソドックスであるがやはり中学生と語わせる返答だつた。
「それはね」「まあそうだよね」「それならわかつてゐからこよ。向こうでも注意されるよね

「それはね

とりあえず猛獸についての話はこれでおおよそ終わった。

「あと毒蛇とかチーターとか一杯いるけれど」

「それもわかつていいから

「あとはね」

しかし彼はまだ言うのだった。

「虫に注意してね

「虫! ?」

「そう、蠅や蚊にね。それもね」

「そんなの日本にも幾らでもいるじゃない」

こう返す定文だった。

「蠅や蚊なんて」

「刺されたらそれで伝染病になつて死ぬらしいから」

「死ぬ・・・・・」

流石に死ぬと言わわれては定文も顔色を変えてきた。青くなつている。

「死ぬんだ」

「向こうの蠅や蚊って凄いらしくいよ」

昌信はそんなことまでチェックしているのだった。もう既に行く
氣充分である。

「手が林檎が中に入つてゐるみたいに膨れてね」

「林檎が・・・・・」

「切り開いたらそこから幼虫が一杯出でね

「何、それ」

顔をさらに青くさせての言葉だった。

「滅茶苦茶じやない。そんな虫がいるなんて

「確かそれが蠅だったかな」

「蠅が・・・・・」

「だからさ。注意してね」

ここでも彼が一緒に行くという前提で話す昌信だった。

「くれぐれもね」

「うん・・・・・・」

「じゃあ夏休みね」

やはり行くのは既に決まっているのだった。結局定文の返事を聞かないうちに。

「行くよ」

「うん」

えらいことになってしまったと思いつつも頷くことしかできない定文だった。時間はあつという間に進み夏休みに入った。そして遂に彼等は中央アフリカに来たのだった。

「暑いなあ」

定文は空港から降り立ち外に出たところでも「ひづ」言つた。

「日本よりもまだ」

「そうですね」

しかし隣にいる畠信は平気な顔である。二人はそれぞれ長袖にジーンズである。長袖が暑いことの原因だが横にいる初老で白髪の人が定文に言つてきた。

「それでもですよ、牧野君」

「はい」

定文もその人に対する態度は素直に応えた。礼儀正しい声で。「ここに来たのはね。ただ来たのじゃありませんから」

「オシツオサレツですよね」

「そうです。稻垣君から聞いていますね」

その人は眞面目な声で彼に問うのだった。

「あの動物のことは」

「本当にいるんですか？先生」

「ここで定文はその白髪の人と呼ぶのだった。

「ここに」

「いますよ」

その先生、美作先生ははつきりと定文に答えた。

「間壁」一語の歴史

あれで口へテ、シケの小説しやんですか？」

その上、上川先生の作者である

ノーラン

先生は定文の問いには直

おはな

「でもかくのうかうには二年生のアリス

やはり答へずに口の言葉を繰ける。

卷之三

「アフリカに熊はいません

とにかく答えるに自分の言葉を話す

卷之三

「見たという人もいます」

「でし」が「リ」がは無いしなが「たんて」が「たんて」

卷之三

あれって何処にでもいるんじゃないんですか?

アカセナにはいなひのこ

先生は定文の知らないことを完全に自分が知っているから相手も知つていいと一の考え方の下で語る。實に面倒な思考パターンである。

しかし見たという話が結構ありますよ

卷之三

「そしてライオンも」

話は今度はライオンに飛ぶ。

「水のライオンと並のライオンがいます」

「何ですか、それ」

定文にとつてはこれまで初耳であった。

「水中を泳ぎ回つたり岩の上に住んでるライオンですか?」

「その通りです」

「ああ、あれですね」

ここで声をあげたのはこの場ではこれまで沈黙を守つていた畠信だつた。

「あのサーベルタイガーに似ていて河馬を殺すのと並の上で咆哮しているという」

「はい、それです」

先生は納得した顔で頷きながら畠信のその言葉に頷くのだつた。

「そのライオンです。一種類いる」

「アフリカにはまだまだ多くの謎があるんですね」

一人でそう勝手に結論付ける。定文が今こうしてここにいることを決めたのと同じ流れだつた。やはりかなり強引な流れであつた。

「だからオシツオサレツも」

「ですが稻垣君」

「はい」

「オシツオサレツはいますよ」

先生は自信に満ちた声で彼に述べた。

「それは間違いありませんから」

「そうなんですか」

「私は情報を手に入れました」

顔を上げ毅然とした声で述べる。

「ですから。間違いありません」

「何処ですか?」

「インターネットです」

自信に満ちた声で定文の問い合わせに答えた。

「検索したら出てきました」

「そうだったんですね」

情報の出所を聞いて思いきり駄目だと思う定文だった。顔には出しているが言葉には出していないので先生と昌信にはわかつていなければ。

「英語で書いていまして。そこはですね」

「何処ですか?」

「ついてきて下さい」

二人に対してもうつってきた。

「既に車は手配してもらっていますので」

「早いですね」

「疾風怒濤」

これまた実に大袈裟な言葉であった。

「それが私の行動哲学ですから。既にここに来るまでに全て手配しておきました」

「それで何処に行くんですか?」

「カメリーンとの境です」

とりあえずサッカーに詳しくないとあまりわかりそうにもない国名が出て来た。定文も昌信もサッカー部ではないがそれでもサッカーには興味があつたのでどの国かはわかつた。

「そのとの国境の森林地帯にいますので」

「そこにですか」

「車だとたっぷり一日はありますね」

これまた随分な距離であった、

「では。行きますか」

「いきなり一日ですか」

「アフリカでは短い時間ですよ」

一日と聞いて慄然とする定文への言葉だった。

「ですから。さあ」

「わかりました。それじゃあ」

「行きましょう」

こうして三人は先生が既に手配していた車に乗つてそのカメリーノとの境に向かうことになつた。中古の日本車は悪路にもそこそこ快適だつたが一日どころか一日かかつた。境に辿り着いた時定文はへとへとになつて車から出て來たのであつた。

「ここですね」

「はい、ここです」

へとへとの定文に對して先生は全く平氣な顔であつた。昌信は暑い中でも車の中ですやすやと寝てゐる。どうやら何処でも寝られる体質らしい。

「この森です」

「凄い森ですね」

森というよりはジャングルだつた。三歩先さえ鬱蒼として見えない。その中に何がいるか全くわからない。とりあえず入りたくはない場所だつた。

「ここつて

「ここにいますよ」

「そのオシツオサレツがですか」

「ああ、着いたんですね」

昌信の声が聞こえてきた。

「意外と早かつたですね」

「一日遅れでかい！？」

呑気な顔で目をこすりながら車から出て來た昌信に對しての言葉だつた。

「それで早いつて」

「だからここはアフリカじゃない」

「アフリカだから何でもいいつてわけじゃないだろ？」「だからさ。日本の常識は通用しないんだよ」

彼は極めて落ち着いた声で定文に返すのだった。
「だからオシツオサレツだつているんじゃない」「だからオシツオサレツだつているんじゃない」

「あんな動物何処にもいないよ」

この期に及んでもという感じでムキになつて言つた文だった。

「そんな前後に頭がついているなんて」

「信じる信じないは勝手です」

先生はここで彼に対してもつた。

「ですが。 真実は一つです」

「いないつていう真実がですよね」

「それじゃあさ」

ここでまた昌信が彼に言つてきた。

「あれは何なの？」

「あれ！？」

「そう、あれ」

昌信は自分の真正面を指差して言つた。

「あれ。 つていうかこれだね」

「これ・・・・・・」

ここで自分の周りを見る定文だった。すると。

そこにいた。山羊に似た生き物がところであつた。

「えつ！？」

定文はその生き物を見て思わず声をあげてしまった。

「頭が前にあつて」「頭が前にあつて」

まずその頭を見る。確かにある。

「そして後ろにも。同じものが」「そして後ろにも。同じものが」

「あるね」「あるね」

その彼に畠信が答えた。

「あるよね。しつかりと」「あるよね。しつかりと」

「嘘だろ！？」

「嘘だろ！？」

足はしつかり四本ある。間違いない。

だがそれと一緒に頭が前後に一つずつあるのだ。やはり一つある。

常識で考えて有り得ない、そのオシツオサレツがいるのであつた。

「本当にこるなんてよ」「本当にこるなんてよ」

「牧野君」

しかしここで先生が彼に声をかけるのだった。

「人間の目はですね」「人間の目はですね」

「人間の目は」「人間の目は」

「嘘はつきませんよ」「嘘はつきませんよ」

「こう彼に言つのである。

「心は嘘をついても目は嘘はつかないのでですよ」「じゃあこれはやっぱり」

「そう、オシツオサレツです」「そう、オシツオサレツです」

はつきと彼に告げるのであった。

「紛れもなく。オシツオサレツです」「紛れもなく。オシツオサレツです」

「嘘だ・・・・・・」「嘘だ・・・・・・」

目は嘘はつかないと言われてもじつはわざわざを得なかつた。

「こんなのがつてよ。本当にこるなんて」

「僕の言つた通りじゃない」

「ここで昌信がまた彼に言ひへ。

「いたでしょ？ 実際に」

「何でこんなもんいるんだ？」

定文は次には首を傾げさせた。

「こんな訳のわからないものが。どうしてなんだ？」

「わからないのですか」

「全く」

また先生に答えた。

「こんなのが本当にいるなんて。何でなんだ」

「世の中には色々とわからないことがあります」

先生らしく理路整然とした言葉である。

「ですからこのオシツオサレツもまた」

「いるんですか」

「やうこりつ」とですよ。問題は最初から有り得ないと決め付けない」とです

「最初から決め付けない」

「その通りですよ。現にオシツオサレツは今ここにいますね」「はい」

もう認めるしかなかつた。実際に今彼の田の前に動いて草をその前後の頭でむしゃむしゃと食べてゐる。それは疑いようがなかつた。それはもう

「頭が一つになつたのは最初は突然変異だつたそうです」

「あれですね」

昌信が先生に対して応える。

「頭が一つある蛇と同じですね」

「その通りです」

「それなら僕も知つてます」

定文も頭が一つある蛇のことはテレビ等で知つていた。あの蛇も

信じられないものがあるがそれでも本当にこりのことは事実である。

「見ましたから。テレビでですけれど」

「それと同じです。そしてです」

「ええ」

先生の話はさらにより続く。

「アフリカは何しろ肉食獸も多いので」

「それに備える為に定着したんですか」

「その通りです。ですからこうなつたのです」

博士はオシツオサレツを見ながらまた述べる。

「頭が二つの生き物に」

「そうだったんですね。それで」

「ちゃんとトイレもできますし身体の構造も普通ですよ」

先生はそれはちゃんと保障するのだった。見れば後ろの頭の下のところに肛門等もある。見ればこのオシツオサレツはオスであった。「後ろの頭が尻尾のかわりに出ているだけで」

「そういうことですか」

「そうです。何はともあれオシツオサレツは本当にこります」

「そうですね」

とにかくこれだけは間違いがなかつた。最早否定しようがない。定文は今はしつかりとした顔で頷くばかりであった。

「わかりました」

「わかつて頂き何よりです」

先生はまずはそのことに満足した顔になる。

「それではですね。次は」

「次は?」

「私に付き合つて下さい。宝石を見つけに行きますよ」

「宝石ですか」

「七色に輝く幻のレインボーダイヤモンド」

また随分と派手なものである。

「それが見つかつたそうですから。早速調べに

「ダイアはいらないんですか」

「調べるだけです」

どうやらダイアの価値には全く興味がないらしい。完全に研究者として動いている博士であった。

「ですから。早速」

「はあ」

「じゃあさ、定文君」

昌信が明るく彼に声をかけてきた。

「行こう。今度はそのレインボーダイアモンドを観にね」

「わかったよ。それにしても」

急かされながらもまたオシツオサレツを見る。その不思議な生き物は自分がどれだけ不思議な存在と思われているかということは全く意に介さずのどかに草を食べ続けている。彼はそれを見て言つのであった。

「本当にいるんだな」

最後にこう言つて昌信に手を引かれて車の中に入る。先生が運転するその車はせっかちに出发する。オシツオサレツはその車も意に介することなくただ自分の時間を過ごしているのであった。

オシツオサレツ 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8409f/>

オシツオサレツ

2010年10月8日15時31分発行